

ケアセンターけやき

症 例 概 要 利用者 : 70代 女性 要介護2

利用期間 : 令和2年12月～現在

既往歴 : アルツハイマー型認知症、橋本病、気管支拡張症

経 過 : 興奮し攻撃的な時と、落ち込みが強く寝てばかりいる時と、子供のように甘える時と日によって感情のムラがあり、帰宅願望が強く離接することもあった。暴力行為がエスカレートし精神科に入院。退院後は暴力行為はなくなったものの、介護抵抗と寝てばかりいる状況が続き、食事を摂らなこともあった。ご本人の望みは「家で夫が作るご飯が食べたい」とのこと。ご家族に説明し協力を求め、職員付き添いでご自宅へ行かれる。望みを叶えることで、介護抵抗が減り、笑顔で過ごせるようになった事例。

内 容

入所前は夫と二人暮らし。実行機能障害があり、家事のすべてを夫が行っていた。興奮し攻撃的な時と、落ち込みが強く寝てばかりいる時、子供の様に甘えてくる時と、日によって感情のムラがあり。夫が脳出血で入院したことによりますます悪化していく。夫は退院後も主の世話をしていたが限界を感じ、当施設に入所となる。

入所後も、介護抵抗あり攻撃的な様子が見られた。また、帰宅願望が強く、離設することもあった。しだいに暴力行為がエスカレートし、ケアだけでは対応できず、令和3年7月A病院に入院。服薬コントロールされ退院し施設へ戻るが、暴力行為はなくなったものの、介護抵抗は変わらず。ご本人の様子を見ながら入浴や排泄などの清潔ケアを何とか行っていたが、全く介入できない日もあった。また、寝てばかりおり、離床を促しても手をばたつかせて拒否することも度々あり、食事を摂らないこともあった。チームで話し合い、自分たちは、認知症の周辺症状ばかりに意識がいき、その人を見ていなかったことでケアが困難になっていたのかもしれないことに気づいた。決して無理には介入せず、気分がよさそうな時に声がけし、ケアが上手くいく職員が対応、子供のように甘えてくるときはあやす様にコミュニケーションをとっていくと、徐々に介護抵抗が減ってきた。事あるごとに「家に帰る。おとーちゃんのご飯食べてー」と言っていた。

令和5年3月新型コロナ感染者が減ってきたころ、何とか家でご飯が食べられないか夫に相談した。夫は、以前のエピソードが強くあり「また暴れるんじゃないか」「施設に戻らないといたらどうしよう」と心配され、消極的だった。そこで、以前とは違い暴れることはないこと、職員が付き添いをすることを伝え

ると、それならばと了承してくれた。職員付き添いでご自宅へ行くと、仏壇にお線香をあげて静かに手を合わせ、やっと帰れたと嬉しそうに笑顔を見せてくれた。念願だったおとーちゃんのご飯は、「美味しい美味しい」といつもは食事量が少ないが、おかわりして3膳も食べていた。食事が終わると、ご自宅への執着はなく「さあ、けやきに帰るぞ」と、あっさり施設へ戻られた。望みが叶うことで穏やかに過ごせるようになり、ケアを受け入れ、レクにも参加することができるようになった。

周辺症状が強い人ととらえてケアにあたることで、さらにケアを困難にしていることが分かりました。自分たちの関わりが変わることで、ご利用者も穏やかになり、ご本人の望みを叶えることができました。その望みが叶うことで、笑顔を見せてくれるようになったのはキラキラ介護賞に値するとし推薦させていただきます。